

# 左手利きの児童・生徒に

## 対する書写指導について

塩刈 有紀

### 一、はじめに

教育実習で毛筆書写の指導を担当したとき、左手利きの子が右側に硯を置き、実にやりにくそうに筆を扱っている姿に戸惑った。左手のため、時計の十時の方向に筆を入れることが難しく、「先生、どうやってやるの。」と尋ねてきた子に私は何も答えられなかったのである。そのとき、私の心の中に次のような疑問が浮かんだ。

- ・ 現場の先生方は、どう指導しているのだろうか。
- ・ 指導する上で困ったことはないのだろうか。
- ・ 何か、工夫していることがあるのだろうか。

とにかくこれらの疑問を解決したい、という思いからこのテーマに取り組もうと考えたのである。

そこでこの論文では、左手利きの児童・生徒に対する教師の意識と指導の実際、左手利きの子の書字の実態をアンケートからつかみ、その上で、毛筆書写指導のあるべき方向性を探っていくたい。

### 二、教師の意識と指導の実際

現在の小・中・高校生では、実際にどのぐらいの割合で左手利きの人がいるのか、現職の先生は、左手利きの子の書字行為をどうとらえているのか、また左手利きの子に対する書写指導で何か工夫していることはあるのか、左手利きの子の書字には何か共通する傾向があるのかなど、実態を知るために、長野県下の小・中・高の先生方に次のようなアンケートを依頼し、六十九人の先生方に協力していただくことができた。

#### (アンケート結果)

1. 左手による書字行為についてどう考えますか。  
また、そのように考える理由は何ですか。

- ・ 右手で行うことが望ましいが、左利きなのだから仕方ない。
- ↓ 文字はもともと右手で書くようにできているが、本人が苦痛なら直すことはないから。
- ↓ 無理に矯正するとストレスがたまりそうだから。
- ↓ 右手のほうがやりやすいと思うが、右利きと

24人  
7人  
7人  
7人

左利きでは脳の働きが違ふと聞いたから。  
 ↓右利きである自分の経験から右手で書く利点もあるが、無理強いはいけなから。  
 ↓英語の筆記体指導のため、右手で書いたほうがよいと思うから。

せめて毛筆によって書字行為を行うときだけは右手を使うことが望ましい。

↓毛筆の場合は起筆や終筆が特に、左手では困難だから。

↓左手では運筆上支障が生じるから。

↓筆順が右利き用だから。

↓左利きである自分の経験から、初めから右手でやるよう指導を受けるとできるので。

↓無理に直すと他に症状が出やすいので最低のこれだけは、ということに絞って右手を使わせたいから。

・書字行為は利き手で行うことが望ましい。

↓利き手で書くのが自然であり、矯正は不自然な行為だから。

↓無理に矯正したときの精神的・肉体的苦痛が大きいから。

↓利き手以上の上手な文字が矯正によって書け

1人

1人

1人

21人

8人

4人

2人

1人

1人

9人

3人

2人

るとは思わないから。  
 ↓左手で書くことも一つの個性だから。  
 1人

・普段から右手で行えるよう練習することが望ましい。  
 ↓文字は右利き用にできているから。  
 ↓練習次第で鉛筆が持てるようになるため。  
 2人

その他  
 本人の意志・家庭の考えに任せる。  
 両手で書字できると良い。  
 筆順さえ間違わなければ左手でも良い。  
 11人

2. 右利きと左利きの子に、書字行為に於ける違いはあると思いますか。  
 1人

・ある。 46人

・ない。 8人

・わからない。 13人

無回答 2人

3. あると答えた方はどこに違いがあると思いますか。どのよう違うのか、具体的に答えてください。

(複数回答可)

・字形(25人)

- 形のバランスがとりにくい。
- 平仮名、漢字ともに右上がりに整いにくい。
- 右払いが不自然になる。
- 偏とつくりの大きさのバランスがかわる。
- 傾く。
- 字がぎこちない。
- 英語の筆記体の場合、左傾斜になる。

3人 2人 1人 1人 1人 1人 1人

・姿勢(17人)

- 左肩が前に出て傾いてしまう。
- 手のかげになりやすいので、のぞき込むようになる。
- 不自然に体を曲げる。
- 姿勢が悪い。
- 背筋が曲がる。
- 体が横に曲がりやすい。
- 毛筆の起筆・終筆のとき、体をねじっている。

4人 2人 2人 2人 2人 1人 1人

・線質(14人)

- 筆圧が弱い。
- 線がスムーズでない。

3人 2人

- 細い。
- 力が入りすぎたり弱かったりする。
- 止めの部分が弱くなってしまう。

1人 1人 1人

・筆記具の持ち方(11人)

- 筆記具の軸が向こう側に倒れた持ち方になる。
- 字を見るため、ねじったようになる。
- 不自然な感じになる。

4人 1人 1人

・その他(31人)

- 筆順。
- 筆の入り、止め、払いなど。
- 押し書き。
- 運筆。
- 線の方向が↗でなく、↘になっってしまう。
- スピードが遅い。
- 個々の違いではないか。
- 速書きするときに、その差がはっきりするのではないか。

7人 6人 5人 4人 3人 2人 1人 1人

4. 右手で書くよう指導したことはありますか。また、そのようにしている理由は何ですか。

・したことはない。(43人)

家庭、本人の意志を尊重しているから。

無理に矯正するのは良くないから。

必要を感じない、不都合でないから。

いままら遅いと思うから。

学校で強制すべきではないから。

右左にこだわることはないと思うから。

書きやすいほうで書くのが当然だから。

11人

7人

5人

4人

2人

2人

1人

・以前にしたことはあるが、今はしていない。(24人)

右手で書けると便利であるから指導していたが、

本人にストレスがたまるようなので。

以前は家庭の方針で指導していたが、今はあまりそのようなことがないので。

一年生ならまだ直せるが、二年生になればもう無理だと思うから。

本人の意志を尊重しているから。

左手で書いても何も支障がないから。

現在している。(1人)

家庭の希望だから。

5人

2人

2人

2人

2人

2人

2人

1人

5. 指導したことがある方はその際に、どのような点に配慮しましたか。

・無理強いしない。

・本人の気持ち大切にす。

・筆記具の持ち方をしっかりさせてゆっくり書かせるようにした。

・筆順、筆圧を意識させてゆっくり書かせた。

・腕全体でゆったり書くようにした。

・特に配慮なし。

4人

3人

3人

2人

2人

1人

1人

6. 左手で書くよう指導する際に、どのような点に配慮していますか。

・特になし。

・筆順。

・姿勢。

・用具や手本の置く位置を使いやすいようにした。

・丁寧に書くように指導した。

・横画を左から右に書くように指導した。

・右払いなどはゆっくり書くよう励ました。

10人

5人

3人

2人

2人

1人

1人

1人

(考察)

このアンケートは、左手利きの児童・生徒に対する教師の意識と指導の実際を明らかにしたいという願いのため実施した。

その結果、消極派も含めると約八十パーセントの教師が左手による書字行為を認めており、一人を除いて全員現在右手に直す指導はしていないことが分かった。指導しているその一人にしても、家庭による希望がその理由である。つまり、ほとんどの教師は、左手利きの児童・生徒にはそのまま左手で書くよう指導しているのである。また、七十七パーセントの教師が左手による書字と右手による書字には違いがあると答えている。ところが子のような状況にも関わらず、左手利きの児童・生徒に書写指導する際に何らかの配慮をしていると答えた教師は全体の約三十三パーセントにすぎない。左手による書字は右手によるものと字形や線質、姿勢などが違うと感じながらも、それについて指導していない教師が少なくないのである。

現場の教師は確かに多忙を極めるので、そういったところまで配慮する余裕がないのかもしれない。しかし、もし左手による書字行為に何か共通の傾向があり、それが問題のあるものであれば、それを解決するための対策を考えなければならない。

(左手利きの子の書字)

左手利き者の書字には、何か共通の傾向があるのだろうか。中学生の文字サンプルをもとに分析してみる。

調査文字は、横画、縦画、折れ、右払い、左払い、はねなどを含むという観点から、「三」、「水」、「火」、「九」、「字」の五文字に絞った。

筆圧	左手	右手
力入れすぎ	二〇	七・五
やや強い	六・六	一三・一
適度	七・八	六八・一
やや弱い	八・三	七・五
弱い	二〇	四・五

線の伸び	左手	右手
よい	二〇	六〇
ややよい	一四・五	六八・一
普通	五五・〇	四八・四
やや悪い	二七・〇	二五・七
悪い・腐える	四・一	一・五

横西の角度	左手	右手
右上がり	十四・五	十二・一
適度	五十・〇	六十九・六
水平	二十七・〇	十八・一
左上がり	八・三	〇・〇

右払い	左手	右手
私わず止めている	十八・七	二十四・二
直線的に力を抜くだけ	二十二・九	十六・六
上に曲がる	八・三	〇・〇
適切	五十・〇	五十九・〇

火の第三画・左払い	左手	右手
私わず止めている	十・四	九・〇
左に流れる	二十九・二	十三・六
反りすぎる	四・一	三・〇
適切	五十八・三	七十五・七

字の第三画	左手	右手
はねていない	十・四	十二・一
はねが小さい	十・四	〇・〇
はねが弱い	十四・五	三・〇
適切	六十四・五	八十四・八

九の第三画・はね	左手	右手
はねていない	二・〇	四・五
はねが小さい	四・一	七・五
内側にはねすぎる	三十五・四	十五・一
外側にはねる	六・二	四・五
適切	五十二・〇	六十八・一

(単位：パーセント)

(考察)

以上七つの観点で比較した結果についてまとめたい。  
 まず、筆圧についてだが、左手利き者は筆圧が弱いと  
 いうことは決してないと考える。筆圧が弱い人は利き手  
 に関係なく存在するので、筆圧の強弱は個人差であろう。  
 考えてみれば、左手利きの人は左手のほうが力の入れ加  
 減をコントロールしやすいわけであり、左手で書字する  
 からといって筆圧が弱いということにはならないことが  
 わかる。

しかし、線の伸びということになると少し状況が違っ

てくる。線を書く方向が左から右へと決まっているからである。日本の文字には横画が多い。横画を書く場合、指の動きだけで書くと、右手では引く感じになるが、左手では押し形になる。漢字も仮名も上から下へ、左から右へ、つまり右手に近いほうへ線を書くようになっている。左手では手から遠いほうへ線を書くことになり、そのために左手では線に安定感が得られにくいのではない。だが、腕全体を動かして書くと、指を伸び縮みさせて書くよりは安定感が出る。腕全体を動かして書くことは、もちろん右手で書く場合にも大切なことであるが、このような理由から、特に左手で書く場合は気を付けるべき点であると思う。

左手利き者の書いた文字で最も特徴が見られたのは、九の第二画や、字の第三画のはねである。九の第二画が内側にはねすぎる人は、右手利き者では十五・一パーセントに対し、左手利き者では三十五・四パーセントである。また、字の第三画のはねが小さかったり、弱かったりする人は、右手利き者では三パーセントしかないのに対し、左手利き者では二十四・九パーセントにもほのぼの。自分で実際に書いてみても、この二画は非常に書きにくかった。

### 三、筆記具の持ち方

左手利き者の書字活動における用具の持ち方についてよく指摘される。アンケイトでも、軸を向こう側に倒した持ち方をしているという回答がいくつもあった。右手利きの人でこのような持ち方をしている人は見たことがない。なぜ左手利きの人に軸を向こう側に倒した持ち方（逆手握り）をする人が多いのだろうか。

そのことについて、レビーとレイド（一九七六年）がある報告をしている。二人によると、書字の際の手の構え方は大脳半球の機能分化と関係があるということである。通常の手の構え（筆記具の先を紙の上方に向けるやり方）をとる者は、その利き手の如何に関わらず、その言語脳は利き手と反対側にあり、逆手握りをとる者は、言語脳が利き手と同じ側にあるというのである。左手利きの人の六十パーセントは左脳が言語脳であり、四十パーセントは右脳が言語脳である。また、右手利きで右脳が言語脳である人は、ごくまれであることも分かっている。

だから、右手利きで逆手握りをする人は滅多にいないけれども、左手利きで逆手握りをする人は多いのである。そこで問題が生じてくる。大脳の働きを重視して逆手握りのまま書くよう指導して良いのか、やはり良いとされる持ち方に改めるよう指導するべきなのか、ということである。逆手握りは手関節を屈曲位にするため、手指と親指は伸展しがちとなり筆記具を持つ指を曲げるのが

より困難になる。だから逆手握りは書字活動には非効率であるように思えるが、かといって即改めるべきだと主張もできない。逆手握りを標準の持ち方に直した場合に脳機能への影響がないかどうか明らかにしたいからである。

今後、脳の機能が明らかになるのを待つと同時に、書字活動をする際の各指の役割（例えば横画の場合、どの指が推進役であり、どの指が制御役あるいは補助役であるかなど）をそれぞれの持ち方について研究していく必要がある。

#### 四、姿勢

アンケートにあったように、左手利き者の書字姿勢で問題となるのは、手の陰になる部分のをぞき込むために左肩が前に出て傾いてしまうことであつた。横書きの場合、左から右へと書いていくので確かに書いた文字が見えにくい。しかし、左右どちらか一方に傾いた姿勢をとり続けると、脊柱側弯症になったり、内臓諸器官に悪影響を及ぼす恐れがある。だから、左肩を前に出して傾いた姿勢で書字を続けるのは良くない。

書いた文字も見えやすく、かつよい姿勢を保つ方法は無いのだろうか。

右手書字で縦書きの場合、紙面の右側から左側へと書

いていく。この時に紙の位置を動かさず、体をずらして書く姿勢が崩れてしまう。だからこのような場合には、手の置く縦ラインを固定して紙を動かす習慣をつけるよう指導すると良いのだが、左手書字の問題にもこれを生かして考えてはどうだろうか。

問題となるのは、左手書字で横書きの場合である。この場合、紙面の上のほうで書くとき書いた文字が指の陰になりやすいが、中段以下で書くとき右に書き進んでも文字は手の陰にならない。だから、書く位置を中段以下に固定して書くようにすれば、文字のをぞき込むこともなく姿勢も崩れないのではないか。

#### 五、毛筆書写指導について

以上、硬筆書写について述べてきた。では毛筆書写の場合にはどんなことが言えるのだろうか。

左手利き者の毛筆書写に関して、アンケートにもあつたように、左手では毛筆を扱うのは不便でやりにくいか、あるいは左手で毛筆を扱うのは不利であるからせめて毛筆は右手でやったほうがよいなどという考えを持っている人がいる。本当にそうなのだろうか。

長野市に左手で書いて活躍している書家がいる。その方から何か、左手による書字についてヒントがいただけないかと思ひ、お話を伺い書きぶりを拝見した。その書



家というのは黒岩東山先生である。

黒岩先生は二歳の時に小児麻痺にかかり、右手が不自由になった。その後の治療により腕は動くようになったが、物を強く握ったり重いものを持ち上げたりすることができないため、以来左手で何でもするようになったのである。黒岩先生は主に行草の作品を書いているが、やはり楷書には苦勞するそうである。中でも一番難しいのが横画の「一」であるという。これは、私が教育実習の時に戸惑いを感じたのと同じ箇所である。筆を入れる方向が時計の十時の方向であるため、左手ではやりにくいのである。

では、左手で楷書を書くときに工夫していることはないのであるか。

黒岩先生が楷書を書いているところを観察すると、まず硯はもちろん左側に置いてある。筆の持ち方は、正しい右手での持ち方をそっくり鏡写しにした格好である。注目したいのは、紙の位置、つまり書く位置である。普通右手で半紙に書く場合、紙の中心が体のへその位置になるように置くが、黒岩先生は半紙の右端がへその位置にくるようにしているのである。「永」という字では、二画目の縦の線が体の中心ではなく、左胸の位置で書かれるということである。

なぜこのようにするのか。それは、こうすることによって極度に不自然に手首をひねらなくてもよくなるから

である。体の中心より右では、左手の手首を痛いくらいにひねらなくては筆の左斜め四十五度の角度を保てない。逆に体の左側では、それが比較的容易にできる。

アンケートに、毛筆の起筆・終筆のときに体をねじっているか答えた人がいたが、それは右手利き者のするように紙を中央に置いて書いているからではないだろうか。そのような場合、紙を左側に置いて書くとき体をねじることなく、よい姿勢を保つことができると思われる。

また、細筆で仮名を書くときも、黒岩先生は左胸のあたりで書いている。そのほうが、書くとき手の陰にならず文字が見やすいのである。ということとは、硬筆で書く場合にも同じことが言えるのではないだろうか。常に左胸の前で書くようにし、紙を右にずらしていく。やはり姿勢も筆記具の持ち方も正しく保つには、書く位置がポイントだったのである。

書写指導の目的は「日常の書写力の強化」である。書写力をつけるには、文字を書くことを好きになることが最良の方法である。だから、左手利きの児童・生徒に指導する際にはその子が、自分は左手利きだから字がうまく書けないのだ、などと思いつまみまいよう常に気を配るべきである。自分の字を下手だとか嫌いだとか思っている文字に対する意識は高まらないからである。

そのためにも毛筆書写の第一歩は重要である。基本中の基本でありながら、左手利き者にとっては一歩難しい

「横画」だからである。筆先の左斜め四十五度という角度が思うようにならないことから、毛筆を扱うことを嫌いになってしまふ恐れは十分にある。

だからこそ、先に述べたような書く位置というポイントでは些細なことかもしれないが、それを助言・指導でできるかできないかは、左利きの子にとっては大きな差になるのではないだろうか。

## 六、おわりに

左利きに関する研究は、脳生理学や神経心理学などの分野でも徐々に増え、次第に明らかになってきている。しかし、書字行為、とりわけ書写指導における左利きについての研究は未だなされていない。書写指導研究をしている先生から聞いた話だが、書写に関する質問の中で最も多いのが、「左利きの子の場合はどうしたら良いのでしょうか」というものだ。左利きの子を持つ親や教師が一度は考える問題なのだろう。だが、そのような状況にも関わらず、今までこのような研究があまりされてこなかったのはなぜだろうか。

考えられるのは、一つに、左利きが少数派であるということ、二つ目に、左利きはデリケートな面を持つので研究にはその配慮が必要であること、三つ目に、手の働きは脳と密接な関係があり、未だ明らかになってい

ない部分が多いという理由だろう。

このように、今まで触れられてこなかった領域であるから、この論文も数多くの問題点を抱えている。しかし、左利き者の書写指導の研究の第一歩を踏み出し、どこに焦点を絞っていけばよいか、おぼろげながらではあるが見えてきた。

多数の文字サンプルを科学的に分析したり、左利きの子を長期に渡って観察、指導を繰り返したりして、今後更なる研究を続けなければならない。

(しおかり ゆき 飯田市立上郷小学校)